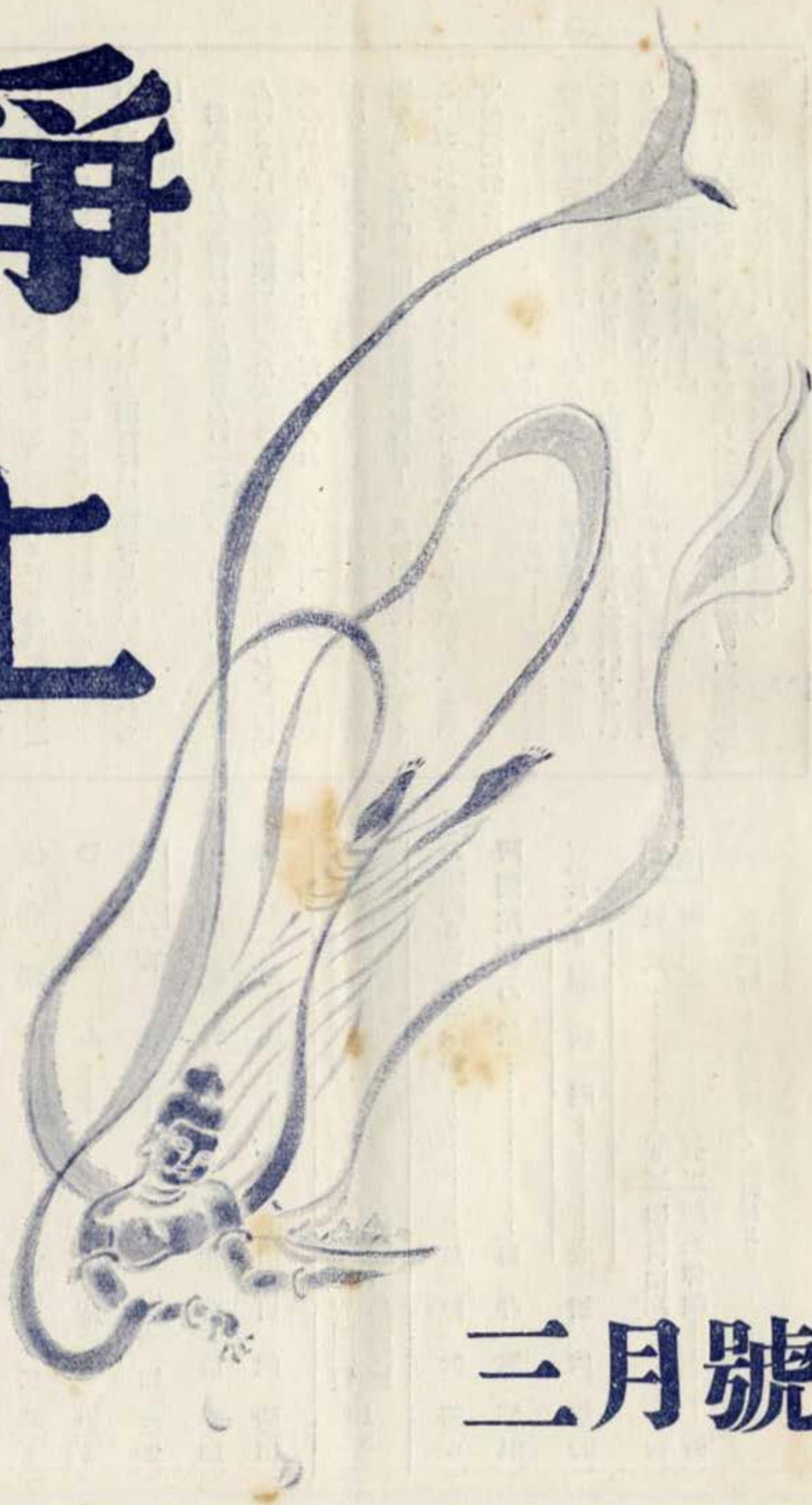


舞王



道久

三月號

テレビでお經を

本誌によく執筆して下さる村田嘉久子さんが、おなじみの「楽しいわが家」を放送された或るとき、第一スタジオの舞臺では芝居を演つている所を見せ、同時にテレビが現れ聲が放送されると、いう三段構えの放送で、いつも聲だけの芝居をしている聲優たちは大部面食らつたらしい。

嘉久子さんも例のおとめ婆さんの一役をつとめたが、嘉久子さんのように永年舞臺で鍛えた女優さんでも、初めてのテレビには多少見當違いで困つたそうだ。そのおとめさんが、佛壇でお經をあげる所があつて、嘉久子さんは多年修業した勤行式の一部を讀誦する。息子の春山平吉が會社からボーナスを澤山に貰つてくる。おとめ婆さんはその袋を受取るとうやうやしく頂いて、急いで佛壇に供える。

「南無阿彌陀佛、ナムアミダブ……(チーン)……無上甚深微妙法、百千萬劫難遭遇……ねえお爺さん、平吉は今年も一年無事に勤めて、御覽下さいまし、こんなに澤山ボーナスを頂いてまいりましたよ。有難うございます……佛說無量壽經、四誓偈、我建超世願、必至無上道……」

というわけである。マイクを通して何百萬の聴取者に「佛壇」を思い出させる放送は、貴い布教である。(佐藤賢順)

淨土三月號 目次

淺春獨居……………吉田絃二郎(1)

ひがん……………佐藤良智(4)

創作 吉水……………東山未知夫(29)

四國紀行……………佐藤治子(18)

母を想ふ……………山田鏡瑞(16)

留學思出ばなし

眞野正順、吉岡義豐
友松圓諦、松濤誠康 (10)

お地藏さまとお念佛……………星野俊英(6)

阿彌陀經の話……………藤井實應(24)

古寺めぐり 慈教庵……………大橋俊雄(22)

隨筆 破戒……………(9) 印度の國旗……………(28)
彌生芝居……………(21) 淨土佛壇……………(27)

表紙挿繪……………松濤達文・芝園だより



浅春獨居

吉田・絃二郎

庭の木立の梢から梢を渡つてゐた鶯が、縁先きの軒端の垂木を啄くやうな姿勢で笹鳴きをつゞけてゐる。巢でも作るつもりか、それにしては場所が變だし、餌でもさがすつもりか、何にしてもめづらしいことである。

いつか天城の山を歩いた時、道のかたはらの篠竹の地上三尺ばかりのところにも巢喰ふてゐる鶯を見たことがあつた。山の小鳥たちも人影稀なところでは草や小笹のなかに巢食ふのであらう。

今朝はまた枯れ枯れの木立にひたきがとまつてゐた。蕭條たる冬枯れの梢にとまつたひたきのすがたはとりわけて美しい。冬木立のひたきはいろいろのことを思ひ出

させる。今朝も庭に美しいひたきの翅をながめてゐると五十年も前の子供のころのことを思ひ出した。

故郷の柴山の小徑を歩いてゐるとよくひたきを見かけたものである。父と母の墓もその柴山にある。今朝庭に來たひたきを見てゐる間にわたくしは父と母のことを思ひ出した。おなじ柴山に眠つてゐる姉たちのことを想ひ出した。

小鳥たちは庭に來て、わたくしたちの心の窓をたたく。濁世の煩惱に沈んでゐる凡夫の心に一刹那清淨靜觀の妙境を覗かせてくれる。

梅が咲きはじめた。

西行法師に

何となく軒なつかしき梅ゆゑに

すみけん人のこゝろをぞ知る

といふ歌がある。

家居に近く梅を見ると、そこに住んでゐる人のこゝろ

までがゆかしくしのばれるものである。

梅の花も萬葉の歌人たちは

青柳梅との花を折りかざし

酒飲みての後は散りぬともよし

梅の花折りてかざせるもろ人は

今日の間は楽しくあるべし

春柳かづらに折りて梅の花

誰か浮べしさかづきの上に

このやうな歌をうたつてゐるところから察して、梅の

花を待ちかねて、青柳を手折つてはかづらとし、梅の小

枝をかざしにしては早春の日を酒に酔ふて遊んだことが

想像される。

しかし

春來れば先づ咲く宿の梅の花

一人見つゝや春日暮さむ(筑前守山上大夫)

といふやうな歌もある。そして山上大夫のこの歌の方がむしろわたくしたち近代人にとつては、自分たちの感覚にちかいものを持つてゐるやうに思はれる。

梅の花は櫻とはちがひ、咲きはじめるにしてもきはめて靜かで、知らない間に咲いてゐる。わたくしの庭にも數株の梅があるが、鶯の初音を聽いてはじめて竹藪の裏の梅がほころびたことを知ることがある。

鶯は梅の開花にはひどく敏感であるらしい。

雪の深くつもつた日伊豆の山を歩いてゐて、紅梅の梢に二羽の鶯がとまつてゐるのを繪のやうに美しくながめたことがあつた。鶯も鶯とおなじく梅の花をもとめて來る鳥らしい。

芭蕉翁は故郷の伊賀上野にかへつて

さま／＼のと思ひ出すさくらかな

と、うたつたが櫻にかぎらない寒風に咲きかをる梅の花も人の心を淨め、さまさまのことを思ひ出させる。

わたくしはかつて梅の花の咲く日伊豆の山を旅してゐた。恰かもそれは涅槃の日であつた。狩野川に近い芝山の懷にいだかれた山寺の窓近く梅が咲いてゐた。今も梅を見ればあの涅槃の日を思ふ。

梅を見ればまた吉野の奥に西行庵を訪れた日を思ひ出す。

ふもとの山は櫻のさかりであつたが吉野の奥はまだ冬枯れて、霜深く眠つてゐた。花の矢倉からさらに急な坂を上つて行くと樵夫たちの住まひであらう。小ひさな部落があつた。その家々をとりかこむやうにして白と紅の梅が咲いてゐた。

あの山の小徑こそ西行法師が一向に修行に専念しつゝ上り下りした路である。苔を拂つて拜みたいやうな氣がしたことであつた。

今年になつて初めての雪が降つたのはまだ正月の松も取れないころであつた。

かねてわたくしは或る茶人たちに雪が降つたら、雪の水で茶を點てると面白いと話したことがあつたが、その茶人たちは、雪の日を待ちかねてゐたらしく淡雪の道を東京から多磨の里まで押しかけて來た。

わたくしは笹の雪を掻き寄せて辛うじて茶釜半杯の湯を沸かすことができた。それでも茶人たちは佛間の爐の前で、淡々たる雪水の茶を喫してよろこんでかへつて行つた。そして歸る時「この次ぎ大雪が降つたら、また雪の茶をいたゞきに來ます」と約束した。

わたくしは寒いのは閉口であつたが、それ以來大雪の日を待つやうになつた。



ひがん

佐藤良智

日本人は、とりわけ、季節に敏感だと言はれる。四季がはつきりしているせいか、日本人という人柄がそうさせるのか知らないが、ひごろのあいさつにしても、いわゆる時候の變化が問題にされる。「おひがん」のことばも、季節と深く結びついて、わたくしどもに親しいものとなつてゐる。漱石の「彼岸すぎ迄」も、もちろん季節としての彼岸だ。「暑い寒いも彼岸まで」のことばは、これからも、長く使はれることでしょう。しかし、これまでの人々が、もつた彼岸の語感と、これからのひとびとがもつ語感とは、大分に違ふものとなるのではないか。「暑い寒いも彼岸まで」と言うからね、と、あつさり、うけながされることばとなりそうだ。特に、都會にあつては、四季の移り變りも、地方程でなく、これからは、ますます、あわたしくなつてゆく一方ですから、萬事は生活にこくのない刹那的な感覺を追つてゆくことになつてしまふのではないか。いま中年以上のひと達は、なつかしい明治のころを思い浮べることが、ことごとにあるのではないでしようか。彼岸と言へばおぼあさんが孫の手を引いて、お彼岸のぼたもちをもつて、お寺参りする圖を思いだすのではないでしようか。何かそ

れは、生活が地についている感じが深い。春の彼岸の、田舎のあぜ道の風景は一入日本的であつた。永い日本の傳統の滲み透つた風景の氣がする。來る年も、來る年も繰り返され、永く永く、日本民族の魂を養い育ぐんできたのではないか。誰人が、佛教の最高理想である、彼岸という尊いことばを、このよき季節に結びつけ、遠く幾世代も離れて、しかも一つの命である先祖代々のみたまと結びつけ、生活とびつたり一枚にした行事を生み出したのであろう。何れは、時、處、縁があつて、このくに、も行はれることになつたのは言ふ迄もないが、それをさぐり求めることはいまとるべきことではない。わたくしは、深き如來のみこゝろから、自然に湧き出づべくして、出でたことゝ信じたい。いつたい彼岸ということばは、元來どういふことなのか。印度の原語ではパーラミタと言ひ、支那では、到彼岸と譯してゐる。あちらの岸に着くということだ。佛教では、その説くところを明らかにするために、ものを對立的に分けて説明する場合が非常に多いのです。生死と涅槃とか、煩惱と菩提とか、地獄と極樂とか、佛と凡夫とか、數えればきりが無い程ある。この彼岸もその一つです。

彼岸は、此岸に對立するものです。河のこちら側と向ふ側という一つのたとえです。釋尊はたとえの大變上手なお方でした。餘談ですが、宗教的天才とも言われる方は例外のない程、たとえを多く用いられた。それはわかりがよいと言ふばかりでなく、宗教的な高い眞理は、普通の概念的なことばではあらわし難いことが多いせいだと思います。

さて、河の此岸とは何か。言ふまでもないこと、苦しみに満ち迷ひに悩み、弱さに泣くわれわれのことです。そうしたわれわれの住む世界です。人について言えば凡夫です。國土について言えば、穢れた國土です。地獄やがきや畜生などの六道の世界です。こゝにわれわれは輪廻轉生しているのです。法然上人は、『罪惡生死の凡夫と呼ばれ、穢土と申された、これが此岸です。人間は此岸的のものです。近代はこの此岸以外にないと言ふのが特長ではないでしようか。實存主義も理解仕様によつては、この泥沼にのたうち廻るにすぎないのではないか。また、近代人が、かろうじて、この此岸のなかから、かすかに求め得るのはヒューマンイズムの窓だけだ。人はそれのみか。此岸は、じつとみつめられなければならぬ。かみしめなければならぬ。しかし、まじめに、此岸をみつめれば、みつめる程、そこからぬけ出ようとする、自らのこゝろが湧きでてくる。その向ふ岸をみまいとしても、見ずに見られない。その向ふの岸が彼岸です。釋尊は、この彼岸をよく見たお方です。そして、彼岸に渡りついたお方です。到彼岸者です。涅槃に入られたお方です。往生されたお方です。わたしどもの御手本です。それを信じ、その道をふみ行ふものが佛者です。

ひと誰か彼岸を信ぜざる。人誰か、彼岸を求めざる。この彼岸に渡る筏が、佛教のもろもろのみ教えです。八萬四千の筏ありという。無限の筏は、もろびとを、乗せて、けわしき河を渡らせんと、まちかまえている。たゞ、ひとり乗らないのが人間です。道は示され、筏は用意されている。たゞ今の瞬間が出發時刻です。その道を見、その筏を見出した時がいつも、そのまゝ出發時刻です。本當は、入る息、出づるを待たないような、きんちようした時なのです。法然上人にあつては、この筏は、ご本願の舟です。なむあみだぶつ、の御名號の舟です。このみ舟に、乗りさえすれば、自ら彼岸の淨土へ渡ることができると仰せられるのです。法然上人にあつては、お彼岸は、お淨土です。念々に乗じ、念々に渡る、淨土往生こそ救われたもの、幸あるもの、仕合せのあるものの抱かれたるものです。

このくにの彼岸は、年に二回しかない。寒からず、暑からず、恵まれた天地自然の季節が彼岸と呼ばれる。あたかも、信するものゝこゝろが、どのような苦難にあつても、悩みにあつても、晴れた彼岸日和の空のように、豊かに、平靜にあることを暗示しているかのよう。あらためて彼岸を季節に結びつけた賢き人に、こゝろから感謝したい。私共の彼岸を讀え、あこがれるこゝろはまことには、念々に、こゝろのうちに、國土のなかに、歩みのうちに、生きいきとしていなければならないのです。日本の友よ、世界の兄弟よ、天下和順する平和の彼岸へ、いつも、いつも、歩み續けて行こうではありませんか。

お地蔵さまと念佛

英 俊 野 星

お地蔵様は全國いたるところ道端などに祀られてあり、童謡などにもよく詠はれたりして大變人に親まれている佛様です。又一方地蔵様ほど變つた佛様ありません。坊主あたまをして街頭にもかまわず立つている。他の佛様の様に立派な冠りをつけて金欄のお袈裟をかけて莊嚴な殿堂の中に祀られていることは少ない。阿彌陀様や觀音様などが殿堂の佛様だとすれば地蔵様は街頭の佛様であります。

地蔵様の本願は此の世の中に救われぬ者があるならばその者に代つてその苦しみを受けてあげたい。若し苦しむ者が此の世の中に一人でもある限り正覺を取らじとて、決して菩薩の地位につかないといふのです。即ち「代受苦」、「不取正覺」といふことは地蔵の本願を單的に表はしている言葉です。そして苦しむ者、悩める者の中でも、より深く苦しむ者よりかよわき者は一層氣の毒であるから進んで救つてやりたい。地獄に落ちて苦しむ様な者は自ら地獄の中まで立ち入つてその罪人を救つてやりたいといふのです。佛様の中で地

獄まで進み入つて慈悲を垂れる佛様は地蔵様の外にはない様です。子供や婦人は大人や男子よりも力が弱いところがあるから、より一層救いたいというのが地蔵様の本願であります。それだから賽の河原の地蔵、安産地蔵、子育て地蔵などというのが昔から傳へられているわけです。

此の様に地蔵様も慈悲の佛様であるが觀音様とは違い、非常に積極的な慈悲を以て誓願としていふのです。かく積極的な慈悲を施す爲めには立派な殿堂の中に金欄の衣裝をつけている譯にはゆかないといふので普通の僧侶比丘の形になり、右手には錫杖を振つて一般の民衆に警告を與え、左手には寶珠の玉を持つて求めるならば幸福の寶を與へんとして民衆を見守つていふのであります。極めて實踐的であります、街頭に立つてゐるのですからいたづらな子供の爲めに地蔵様の首が石ころで叩き落される事もあります、或は不淨のものを投げかけられる事もあります。地蔵様はそんな場合決して腹を立てない。却つてかゝる無禮な不心得の者こそ救つて眞人間たる

の寶を與へてやりたいというのです。ある地藏靈驗記の中に

残りなく人を渡すとせしほどに

我が身はもとのまゝのつぎ橋

と言つていますが何んと尊い有難い誓願ではありませんまいか。

此の尊い誓願のことは地藏本願經及び地藏十輪經の中に委しく説かれてゐるのです。

さてこの誓願を流布して世の中に徹底せしむる爲めに觀音様が三十三の分身を現はして説法せられてゐる様に、地藏様もいろ／＼の

方面に分身されることが説かれてゐる。地藏本願經には四十八の分身、地藏十輪經には四十六の分身、地藏菩薩陀羅尼經には三十九の分身をあげてゐる。地藏様はあらゆる所に於て、またあらゆる場合にそれぞれの身を現じて誓願の達成ににつとめられてゐるのです。

「地藏本願經撮要會解」に十方世界の淨土、穢土、刹々塵々月の萬水に沈むが如く、若しわずかに一佛一衆生有る時は、地藏の分身處として現ぜずといふことなしといつており。

(7)

又寶物集の著者は、

身を二十五に散じて二十五有に住して二十有五有を救ひ、或は十王と成つて中有の旅人を宿し、或は閻魔王と成つて罪人を扶け、或は梵天帝釋と成つて惡業をなだめ給ふ。自業自得の罪、免れ難ければ必ず衆生の苦患に代つて地獄に落ち給ひ、紅蓮大紅蓮の氷の底には億千歳の慈悲の膽を碎いて焦熱大焦熱の炎の中、無量劫の間、忍辱の膚を焦し給ふ、と述べています。

鑛石集第一に地藏様の種々の利益を説いて毎日晨朝に恒河沙等の定に入つて所度の機を觀じ、恒河沙等の身を現じて各々に恒河沙等の世界に於いて各々に恒河沙等の衆生を濟度し玉ふ。豈三十三身のみならんや。無邊の身を現じて種々の趣に應じて拔苦與樂し玉ふ。と言つておるのであります。即ち地藏様は如何なる方法をとつても一人の罪苦の衆生をももらさず救つてやりたいとの念願なのであります。それ故に「地藏經鼓吹」第四卷には次の様なことも傳へてゐるのです。

彌陀、地藏は一體分身にして大悲廣願の薩埵なれば淨土を構ひ玉ふと云へども、本身彌

陀の淨刹へ衆生を引導なされたき本誓にや、極樂界會の聖衆廿五菩薩の隨一無邊身菩薩と顯はれ玉ひて念佛の行者を平生守護し、其の行者命終の直下に彌陀如來來迎引接の立地には五五の菩薩は音樂の役なるとき、此の菩薩は行者をきよめんために燒香の役をなされ、行者を安養に引導し玉ふところの薩埵なれば多くは西方淨土へ引接ならん、と。

此の事は地藏様の本願と阿彌陀様の本願とが相一致した點を強調したもので彌陀地藏同體説、地藏彌陀一體説と呼ばれてゐるものである。

諸佛本懷集にも、地藏法藏同體異名なり、地藏と彌陀ともより同體なるが故に、彌陀の名號をとなへなば、かの御心になはんことうたがひなし、とあり、信曉法師の山海里には、

阿彌陀如來の妙覺にましくては下化衆に相應せざるが故に變じて觀音の形と成り、菩薩形と成り……六地藏、十八地藏も阿彌陀如來にてまします事信知せらるゝ事也。といつて居る。此の様な事は、沙石集、桂川地藏記

地藏多驗記、靈驗記、礦石集など多くの書に散見することが出来るのであります。

則ち地藏様は阿彌陀様の分身に現じて現世の職場々々に現はれて念佛衆生を彌陀の淨土と引接し玉ふ、高野山の慶賢上人は地藏院の地藏様を稱念して西方往生の印明を授かり、地藏靈驗記には地藏様を念じ、或は地藏の稱號念佛する中に阿彌陀様の出現を體驗し、或は彌陀の淨土へ往生するの夢告を得た事の說話がいくつも記載されてゐる。

それ故に地藏様の行者は地藏様とともに阿彌陀様を稱名念佛するものが多い。

さればまた淨土門のものに於ても地藏様を信仰し、その利益を蒙つた實例も少なくない。「地藏經鼓吹」卷六に東山知恩院の智鑑和尚は江州木ノ本地藏尊に祈願して聰明智慧の德を授かつた事を傳え、江戸の感隨和尚は同じく木ノ本地藏尊の利益によつて博學と成ることが出来たといつてゐる。

目黒祐天寺の地藏堂の地藏様は開山祐天大僧正の本地身であつて惠心僧都の作だと「新編武藏風土記稿」は傳へてゐる。また板橋九

丁目の専彌院の地藏堂の本尊は祐天僧正の開眼佛だと口碑は言つてゐる。

又江戸六地藏建立に當つて増上寺の第三十二世貞譽僧正、及び三十四世證譽僧正は相共に眞筆を送つて進んで結縁したことを證明してゐる。(巡六地藏慈悲利益記々載)

それであるから阿彌陀様をお祀りしてある淨土宗のお寺では何處でも門前や墓地の入口などには必ず地藏様の石像が建立されておるのです。徳川時代の末期江戸には「山の手四十八所地藏尊参り」、「東方四十八所地藏尊参り」、「南方四十八所地藏尊参り」、「山の手二十八所地藏尊参り」といふのがあつて盛んに地藏様巡禮が行はれて居たことが「東都歳事記」に載せられてゐるが、この地藏様を祀つてある澤山のお寺の大部分は淨土宗のお寺であります。また現東京都の地藏盆に當つて地藏様を安置して居るお寺の中で淨土宗のお寺が非常に澤山あるのです。

これ皆、現實的な實踐的な地藏様の誓願に依つて西方彌陀の淨土に引接往生せんが爲めに外ならないのであります。

地藏様を念じ、地藏様を禮拜して念佛修行する人も亦何んと有難い、幸福の事ではありますまいか。(大正大學教授 文學部長)



四月號豫告

合 掌

増上寺の昨今

吉田絃二郎
大野 法道

花まつりの思出

櫻村 治子

花まつり實況

京都、大阪、北海道

居合の心(訪問)

木村篤太郎

新興宗教

齋藤昭俊

新宿の銀河というサロンに生れて始めて入つて、とんだ目に合つてしまつた。店の前には、はつきりビール二五〇圓均一と書いてあつたのが勘定書では三三〇圓その他合せて四千圓。あとでわずかにール六本にと驚いた自分が馬鹿氣ており、餘りにも大人氣ないことに氣付いたのはしばらくたつてその方面のベテランに詳しい話を聞いてからである。その時はオーバ―をあずけてどうやら解決したが、これはわたくし自身の全くのオーミステークであつた。しかし考えてみればそれは當然の結果であつたと思う。いわゆる戒を破つたからである。佛教では殺生戒を始め五戒、八戒、十戒という戒めがあるが、それらは何も強制ではなく親切な警告なのである。

人たる者が、自分の心に言いきかせて守らねばならぬいしめである。

しかも、それは萬人に通ずる不變の鐵則である。

嘘をつくな、酒をみだりにのむな、色に耽れるな、生き物を殺すな等々まことに成程と思われる戒めばかりである。この一つ一つを守つてゆけばまさにこの世は平和であり、天國になるのは自明である。

破

戒

しかし犯罪が増加し、社會が亂れ、政治が腐敗し、宗教が墮落するのは、結局そうした古くから戒められてゐる人間として正しく、明るく生きる原則を無視しているからである。

池田勇人氏が度重る放言で不信任をつきつけられたのも、人間の基本的人權は尊重すべきであるという大きな戒めにたてをついたからに外ならぬ。

戦争と平和の問題にしても人々が本當に健全な態度で素直に先人の戒しめた道、就中殺生戒などという厳しい戒めを守つてゆけば今

更ぎよう／＼しくそれを探り上げる必要もないし、再軍備だ、バズーカ砲だ、フリゲート艦だと騒ぐ必要は先づなからう。

佛教を信する者に於ては更に問題重要である。

釋尊の説いた道にそむき、出家としてのあり方、否出家ということをすら忘却するから、とんでもない破戒僧ばかり生れるのであり

佛教衰退の結果を招ねくのである。

まこと戒めは尊い教訓であつて、人生の生きる指針といえる。

わたくしはつくづくわたくしの失敗を通して、痛切にそのことを改めて知ることが出来たのである。

それだけに一層このごろの社會の頹廢をなげかずにはおれない。

あらゆるところで破戒が堂々と横行している様はたゞと身震い

して、目を覆いたいものである。

ウソをつくことで通つてゐる政界など殊の外重々注意してもらいたいのがわたくしの本當の心である。それは政治が國民生活を禍福に分岐するからである。

戒を破つてから、オーミステークでは遅い。轉ばぬ先の杖の譬に従順なこと、即ち古くからの戒めに従順なことが結局は社會を明るくし、世界の平和を確立し、小さくは家庭内の圓滿、自己の幸福を充實してくれるのである。

(酒井尊昭)

(三二ページ、つゞき)

「姉上はまた、何んと弱い心を……。しかし人情はまた深いもの。さらば、今宵ごゆるりと別離の名残りを惜しまれい。」

この日は、色々と勢至丸の出發の準備のために忙しく過ぎていつた。一夜の母子の語らいの時間も矢の如く迅速に經つて行つた。そして一同が寢に就いた後も、勢至丸の可愛い寢顔の上には、一夜中母の眼がまんじりともせずそそがれていたのである。(つづく)

留 学 思 出 ば な し

眞野 正 順

かれこれ三十年にもなる古い洋行談をせよといふ。そんなカビ臭い談をさせて、何が面白いのだろう。と思ふけど、嚴令だから仕方がない。

○

その頃、學生々活の最後コースにさしかゝつていた私は、突然養父を喪い、つゞいて養母を失つた。戸籍にはたつた一人の名が残され、たゞさへがらんとした寺内が急にうそ塞く感ぜられて來た。

この時、ふと父が壯年の頃京都に遊學した話を思ひ出した。東海道五十三次、ほとんど一ヶ月かゝつて京に上つたといふ。今の世に

それだけの距離といへば、歐洲である。私は急に父の眞似がしたくなつた。先立つ費用の見當はつかかなかつたが、「思ひ立つ」といふものは妙なもので、その内どうやら眼鼻がついて來た。でも、その頃から身體が弱かつたので、無事に歸つて來られそうもない氣がしたので、友人と一緒に公證役場門をくゞつた。そして後に面倒の起らぬようにして裸になつたつもりで、單身神戸で船に乗り込んだ。再び見まいと思ふ瀬戸内海の美しさが悲しいほど痛く目に滲みだした。

二三日すると船の中で、すでに世界が變つて來たのを感じた。船客の話がだんだん鋭く批判的になる。内地で口に出せない様な事をあけすけに云ふ。そして、船のとまる港々では歐人が荒々しく有色人種を使從する姿が目

に喰いこんでくる。——こうして海上四十日無事チームズ河に入つた頃にはもう西歐に對するある種の心のかまへが出來あがつていた

○

オックスフォードでは、間もなく入寮が許され、英國學生と起居を共にする事が出來たのは幸運だつた。青い校庭に面した清洒な二室が興へられ、パイプを薫らしている姿など思ひもかけぬ變化だつた。

やがて氣がついて來たのは、この大學全體の生活を通ずる強力な宗教的訓練であつた。我々が内地の宗教學校で受けたものなぞとは飛びぬけて嚴重なもので、それが一般學生全部にきびしく實施せられる。これは全く意外だつた。彼等の誇るゼントルマンシップの根底は、かうして宗教的に固められているものとは少しも知らなかつた。

そんな事で、だん／＼學校生活にも慣れて來たが、新しい煩悶が萌して來た。それは、私は日本で新理想主義の哲學に親しんで來たのだが、どうも英國の經驗派の思想が膚に合はない。前から疑懼していた事だが、やつて見るとますます合はない。とう／＼我慢がし

切れなくなつて來た。

これでは、どうしてもドイツに行くより仕方がない。ところが獨乙語はからきし駄目なのだ。それで仕方なしに英國を選んだ譯なのだが、こうなつては仕方がない。さんざ考へたあげく、死んだ氣になつて、一語も知らぬ未知の國々にとびこんで行くことに決心した。それで、持つて來た荷物も、買った書籍も全部荷造りして日本に送り返し、すつかり裸となつて、小カバン一つ。ポケットの中に「日獨會話」を握りしめて、ドーバー海峡を渡つた。

○

ベルリンに居た友人が、親切に部屋を用意しておいて呉れたので其處に落ついたが、さて、一語不通である。まず朝食は家で作つてくれるからいいが、晝、夜は外に出て取らねばならぬ。そうして友人の御厄介をかけても居られぬ。彼は細君同伴である。仕方がないから時には一人でゆく。ところが献立表はあの妙なドイツ文字でくしやく書いてある。何が何だか分らない。仕方が無いから、指先きでいゝかげんなところをコツンと突く。

すると妙なものを持つて來て喰はせる。同じ食堂では面白くないから、晩は別な所へ行く。そしてまたコツンと突く。確かに晝とは別な所を突いたつもりなのだが、見ると晝と同じ肉が皿の上につてゐる。

これで、とにかく食物にはありつく事が出來たが、たまには散歩もしたい。これがまた難儀である。一度迷つたら最後歸つてくる見込がない。まづ片方のポケットに日獨辭典を入れる。片方には獨日辭典、兩方をしつかり握りしめて靜かに門を出る。まづ振り返つて我家の格好をよく眺めて記憶しておく。それから、そろ／＼歩き出す。曲つちやいかん、たゞ眞つすぐに行く、そしていゝかげんな處でまた一直線に歸つてくる。曲る時は大變だ立ち止つてその角をしげ／＼と倦きるほど見しておく。そして一直線に行つて、また一直線に歸つてくる。

こんな事をしてゐる内に、だん／＼慣れて來た。妙なもので其國に居ればその言葉を覺えるのも速い。大學聽講のカードを買つた。パウエル、ティリッヒを訪問して怪しげな議論をしかける度胸も出來てきた。それで一安心

して夏の休暇には、スウェーデンの公使をしてゐる親戚を訪ねる事にして、美しいスカンデナヴィアをゆる／＼歩き廻つて、再びドイツに入つたのが、忘れもしない大正十二年九月二日。夜汽車の中でひらいた夕刊の上に、さつと目についたのはあの關東大震災の記事だ。報道は極めて誇大に傳へられたから、在留邦人は不安と動搖の日を過したが、やがて我家もその運命を共にしたのを知つて、私は歸國を決心した。

○

旅費の關係もあつて、シベリア經由の一團に参加した。ソ聯が戰後初めて許した好意である。それから二十日、辛氣くさい箱車を引つぱつて、汽車はのろのろとシベリアの野をゆく、九月といふにうそ寒く粉雪がとんでゐる。モスコで買った新聞には、被服廠のゴロ／＼した惨死體の寫眞がのつていた。日本全國至るところ、からだと書いてある。

憂鬱にならざるを得ぬ。

滿洲里に來たら、突然持つていた荷物全部とり上げられた。スパイの検査だといふ。たつた一つ許された小さなスニツケースを片手

にさげて、私は内地の土を踏んだのであつた。そして急いで東京に来て見ると、家の跡に河原のような焼瓦がひろがり、樹一本の影もない。家財はもちろん、外國で集めて送つた書籍其他もすっかり空に消えてしまつたのだ。その上、心のあてにして來た多少の財産も、留守の間に友人がすっかり費消して一文も無くなつていた。

これで、ちやうど三度、裸かになつたわけである。



友松圓諦

私は昭和二年から四年にかけて、ドイツに昭和四年から六年にかけては、フランスに留學を致しました。當時ヨーロッパには淨土宗關係の者は七、八人はいたようで、フランスには岡本貫瑩、ベルリンには笠原、ハンプルグには大橋戒俊、ハイゼルには若山、ボンには松本徳明などがいたもので、仲々盛んでした。

私はかねて留學したいものと、フランス語の會話や、又ドイツ語に力を入れて居りましたし、ニャーヤ・ティローカにはパーリ語を學んで行きました。

先生は渡邊海旭先生に紹介して貰つて、ハイドルに居たワレーザーにつきしました。丁度私は先生の隣りの家に下宿をしまして、非常に便宜を得、奥様も立派な方で、お蔭で愉しい遊學生活を送ることが出来ました。

當時は佛教學者には有名な人が多く、フライブルグにはワイマン、ベルリンにはリュエーダース、チエルバッキ、ガンにはブサン、パリにはレビー、イギリスにはリスデビスなどが健在でした。

そこで私はワレーザーにはデビアバダーナ等の原典による佛典研究をやる一方、宗教社會學の門をたゞき、マックス・ウェバーの研究所に通いました。ヤスパース、マンハイムなども熱心に研究をして居りました。マックス・ウェバーは當時ブツディズム・アンド・ブラフマニズムの研究もやつて居りました。私も佛教經濟學に關心をもつていたので、この勉強を始めたわけです。

フランスではレビーが日本から歸國した後で唯識二十頌、三十頌を講義して居り、仲々興白い時でした。教授についての想い出は月二度のティ・パーティーでした。これにはフーシセ、ベリオなどの一流の學者が夫婦同伴でやつてくる。その大家達に伍して私達も一緒にお茶を飲んだり、談笑したりしたのでしたが、その雰囲気がとても愉しく想い出になっています。ベリオなどもジュアンノなどと親しげに呼んだりしていました。さういう中で印度哲學が語られるのですから愉しさは格別でした。

講座は一流の學者が集まつて、お互に意見を出し合つて、進められて行くもので、日本から來た漢文の讀める私にも、「オイ友松、これはどう思ふか」などと意見を求められたりして、大いに感激しながら勉強したものです。全くティ・パーティーと云い、講座と云い老若男女、國籍の區別なく、一つの會下に相和して進められる佛教の研究は日本でも大いに見習うべきであると思います。

生きた佛教運動の團體として、佛教友の會があり、三、四十人のものが集まつていまし

た。木魚なども具へてありましたが、佛教美術を中心としたものでした。

向うに行つてゐる間に、オックスフォードでアジア大會があり、日本の遊學者達が集まつた時は、お互に熱をあげたものでした。



吉岡義豊

中國人の信仰を一口に「北道南佛」と言つてゐる。北方は道教が盛で、南方は佛教が榮えてゐるとの意味であるが、事實は決して南北の信仰をこのように區別することは出来ない。北京や五台山の佛寺は、蘇州、杭州のそれに劣らないし、天師道教の總本山は南方江西省の龍虎山にある。などの一例によつても中國のことは簡単に割切れないことがわかるであらう。

佛教は日本にも永い歴史を持つてゐるから、特に理解に苦しむこともないが、道教に至つては中國の特製宗教であるから、實際に彼地に渡つて見て來たものでないと、一寸見

當がつかない、のみならず中國人の信仰は、極端に言へば道教一色と言へる。佛教が傳來して所謂中國佛教として成立發展したのも、道教といふ素地の上に根を下したのであるから、中國のことを知らうとする際には、これはまことに大切な手がかりとなるものである。

歲月は流水の如し、といふが、若い胸をふくらませて北京郊外の全眞道教の總本山白雲觀に住み込んだのは、昨日今日のこのように思へるものゝ、よく考へ直して見ると、すでに十數年前のことである。北京の西の郊外と言つても歩いて街から十數分の所にあるのだから、まことに便利至極の場所である。大少數十棟の殿堂が櫛比している中に、當時は三百名ほどの雲水道士が修業してゐて、總本山の名に相應しい活況を呈してゐた。私は住込んだその晩にカンテラ生活を味つて一面懐かしく、一面まことに不便を感じた。翌朝飯の時に早速住職に、實はこゝに電燈施設のなことをウツカリしていたが、昨夜はじめて實驗以てこれを知つたこと、電燈を持たぬことは全く非能率的だし、北京の街つゞきのよるな所だから、早速その設備をしてはどうか

などの話を持ち出して見た。ところが住職道士の曰く、まことにごもつともな話だが、一つにはこの廣い所に電燈を引いたのでは、その經費は大變なものであること。それにもまして、道士は日が暮れると同時に寢て、夜が明けると同時に起きるから別に電燈を必要としないといふことであつた。成程、無爲自然の道を求めて、自然隨順の生活を信條としてゐる道士に、馬鹿げた注文を出したものだといふに赤面した。その夕刻よく注意して見ると、日が暮れてから灯火を使用してゐるのは、私の部屋と會計部屋の二つだけで、後はあの廣い建物のどこにもあかり一つ見えな。會計部屋も一時間足らずで消灯した後は私の部屋の一灯だけとなつた。勿論これは私が住込んでゐた間は毎晩繰返される現象であつた。やれ研究だ、調査だと言つてアクセクしている自分が、この時ほど惨めに情なく思へたことはない。然もこの悠々たる白雲觀を研究するなどと稱して夜を更してアクセクしてゐるのだから、皮肉といふ言葉は、こんな時のために作られたものだらうとさへ思はれた。

歴史はうつる。この總本山も、中華人民共和國の新政になつてからは、僅かに數人の道士が起居して興へられた若干の農地に、自耕自給してゐると聞いては全く今昔の感にたえない。落花生油の一灯を點して起居したあの部屋は今どうなつてゐるだろうか。千年の面影そのまゝの道士たちは何處で神仙を求めて不老長壽の工夫をしてゐるのであるか。

(大正大學助教授)



松濤誠廉

歐米の佛教の狀態は大體二つに分けられる。一つは歐米人が自分から進んで佛教を研究し、更に進んで信じようとするものと、一つは他國の佛教信者なり僧侶が行ふ布教に端を發したものである。この二つの流れのうち第一の場合が大部分で、後者は日本佛教が米國の一部に日本人を中心としあ行つて居るものが主である。

歐米の學者が梵語パーリ語西藏語を研究し

てをり思想に感銘して、それを信奉して自己の生活の中心としようとする動きはかなり古い以前からある。これ等數多い學者の研究業績は佛教國まで多大の影響を與へ、これに深さと確實さを與へたことは否定出來ない事實であるが、自分の宗教として信ずる云ふことは全く別問題である。彼等の多くは自己の研究する宗教々理をかなりの熱情をもつて説くが、開手がその教理の缺點を指摘すると「私は信者ではない」と逃げるのが一般である。ブサンの様に佛教研究にあれ程の業績を残した學者も、高楠先生が佛教徒になることを進めても、ついに舊教徒として止つたと云ふ話を聞いてもわかるような氣がする。勿論學者を通して佛教に感銘して私財を投じて、ベルリンにある様な一種の佛教寺院を立てた人がないでもないが、この寺院で行はれる毎月の布薩はベルリン大學の助手が中心になつてゐる程度である。

信仰は知識だけでは駄目である。宗教學では改宗を入信の重大轉機と見るが、その爲めには既成教團を要する。この點ではハワイを中心として行はれている日本佛教の教化の方

が實績を擧げていようが、詳しいことは私は知らない。

一方佛教の信仰はキリスト教のそれとは異なる點がある。單に教團に籍を置いてその信條を生活の基礎としても、嚴密な意味で佛教信者と云へない場合があるからである。佛教徒は覺性を中心として全精神内容を再編成することとを必要條件とするからである。この爲めには立派な佛教者がどしどし外國に行き、そこに定住して、その全生活を以て教化せねばならぬ。その生活形式も教理も必しも傳統に依る必要はない、彼等と同じ生活を覺性を以て生きることが最も大事である。この様な生活をした人は他にもあるかも知れぬが、最も偉大なひとり、渡邊海旭先生であつた。あの地に行つて見ると先生の感化は存外大きく、先生の人々から附けられた「菩薩」と云う名は必しも單なる綽名でないことを知るからである。

(大正大學教授)

×

×

×

×

×

×

映画

ひめゆりの塔(東映)

單なる戦争記録映画ではない。全篇から受ける感じは暗くて悲惨である。戦争というものが如何に悲惨なものであるかを強く訴えている點、政治色を帯びた反戦映画ともいえよう。又沖縄戦が日本帝國にとつては最後の牙城であつたが、そこに容赦なく浴びせかけてくる米國の猛烈な攻撃に對して、殆んど絶對的な、憎しみを抱かせている點反戦映画の色彩も濃い。この映画の制作意圖は「盲目的に信ずる者の悲惨」を描いたものだといふ但し書きがついている。逆に言えば沖縄の戦場に散つた青春に富んだ乙女たちが如何に清純であつたか——盲目的信念の故にか——を描かうとしたものとも考へられる。

畫面は先づ沖縄に對する米艦隊の猛烈な艦砲射撃を撮つてゐる。昭和二十年三月二十四日の朝である。戦局の重大化に混雜を呈する市の模様を師範學校を中心に描き、沖縄の女學生が勤勞工作隊として戦線に動員される。狭くて惡臭のたぐよう外科病院になつてゐる洞クツの中で、患者の介抱や水汲みなどに女學生は必死に働く。その中で負傷する生徒も死んでいく生徒もいる。雖て病院は移動することになる。歩けない重患は手榴彈を渡されて残され、女學生は負傷兵を介抱し乍ら豪雨の中を進

む。途中は苦難そのものである。やつとのことで目的地糸洲部落に辿りつく。最後に生徒達は兵隊と共に洞窟に立籠る。終戦が近い。米軍からの投降勧告が放送される。兵隊と行動を共にした生徒たちは投降もならず、遂に砲撃されるもの壕から兵隊に追い出されて死ぬもの、對岸迄泳いで機銃掃射で殺されるもの——みんなちりぢりに死んでいくのである。

一度この映画を見る人は、誰しも戦争に對する嫌惡と、憎惡を感じる事であらう。そして又、人間の脆さ、無力さ、馬鹿さを知らされる事であらう。大きな破壊力の前には、小さな人間の力も無意義なのである。そして唯頼り得るものは、たとへそれがはかないものであつても、溫い愛の世界は、命の有限に對比して、不滅なものである事を知るであらう。

この映画を見た若い人達がどんなに感じたかを見てみよう。「あの映画を見ながら『憎らしい仇をとるんだ』といった人が隣りの席に居ました。その氣持は再軍備から戦争につゞく危険なものです。そのうえ、人々の願ひである平和な社會を遠ざけてしまします。」

先生と生徒、生徒同志、軍醫と生徒、そして生徒が負傷者に示す愛情がジーンと胸にこたえました。何十年もの間、望みなから求められない程、平和ということは難かしいものでせうがあの愛情が少しずつでも、世界の人々の胸に植えつけられることによつて、永い間の念願だつた戦争が防げるのではないでせうか。」(高校生、萩原トシコ)

——とうのす——

母を想う

山 田 鏡 瑞

昨年は求められるまゝに「佛説父母恩重經」の講義を數回各所で致しました。段々話してきます内に人に説いている感を深くしました。

それまでは人には話しても自身には母の愛が分りませんでした。それだけに人一倍母の愛を求めて來ました。大學で英文學を專攻致

します折も、人と違つて研究の對象に母の愛を求めました。スコットランドの文豪ヂェイムスバリーと言う人が實に母に可愛がられ、又母を慕つたと言う事を傳記で知り、バリーの研究に數年を過しました。バリーの研究と言うよりはバリーの母への愛を通して、母子の情を眺めたのであります。バリーとその母との間の愛情は幾分なりとも掴み得ましたが、私自身の母への愛情は未だ其の頃は分りませんでした。

尤も私の母は私の五才の時七人兄弟を残して廿九才で亡くなつたのです。

母は私が一番弱かつたので後添えの人に託すに忍びず、私だけを母が一番可愛がつて下さつた檀那寺の老僧夫妻に託したのです。實は此處に已に母の私への絶大なる愛があつたのです。

私の實家は祖父の時代から寺の總代を務めていました關係で老師に母は大變可愛がられていました。又老師は酒を好んだので、酒屋であつたのを幸、母は私を抱いては裏口から寺へ酒を運んで、老師を喜ばせたと、後に老師からよく聞かされました。こんな譯で私は小僧としてでなく、客分として、その後老師が逝去されるまで廿年の長い間その寺で育てられました。

老師は私を素晴しく可愛がつて育てて下さつたので、幼少の頃から大學にはいるまで母のない淋しさを殆んど忘れて過しました。それでも唯一度母を追慕した思い出があります。小學校の四年の頃でしたか、夏休みになるとその寺へ、老婆の親類の家族など、二三組も避暑に泊り込んで來るのです。毎日連れ立つて海へ行くのが日課

です。私もその人達と喜々として連れ立つて山路を往復したものです。その日に限つて、親類の子供達がその母と一緒にあつた事に改めて気がつき、どうして私だけが、肉身的に一人ぼつちか知らず、思うとたまらず、そのまゝ物も言はずに駆け歸つて、寺の御門で泣いていました。留守番の老師が来て理由をたづねても、廿年間、その前にも後にも一度も老師に口答えした事もなく、返事しなかつた事もないのに、その日だけは一言も答えず黙つて泣いて居ました。こんな事も昨年お説教している折想い出されて話した事がありました。

共々父母恩重經を身讀して見ますと、例え五才まででも大變手の懸る間、母の慈愛を一杯に受けた自分を思いますと、母の愛を受けなかつたと思うのは間違いで、唯知らなかつただけである事が思はれ、晩年次々に老師夫妻から語られた母の影を偲び本當に有り難く思はれて來ました。

堅氣一本の父からも教はる所もあるが、それにも増して信仰深かつた母の慈愛深さから私の生活態度を正しく深くして呉れるものがありました。

母は毎朝自分だけ店員より一時間早く起きて店を開け、貧しい人々に、味噌醬油等を特別に安く賣る事を、死の病床に就くまで續けていたと言う。随分大勢の人々が毎朝列をなして買いに來たものだと思います。幼少の時から私は此の話を何回ともなく老師夫妻から聞かされていました。

母の此の行爲こそ、信仰の結果であり、母性愛の社會的進出だと

思います。

我が子だけへの愛情、我が一家のみへの關心でなくして、廣く社會に眼を向け、心溺れる人々、乏しき生活にあえいで居る人々へ奉仕する心、正に母性愛の擴大強化であります。澤山聞かされた母への思い出話の中、私は此の母の慈悲行爲程尊く、有り難いものはないと思つて居ます。

「衆生病むが故に我も亦病む」の佛心を以て現在教師の任に當る様になつた私の寺院生活へ這入つた遠因は、全く母の信仰の賜であると思はれます。私にとつて母を信ずる事は佛を信ずる心と一體であります。

「人が此の世に生れて、自分の母を信ずる事の出来る者は最も幸福な人である」と古人が申して居られました。その點で私程幸福な人間はないと毎日感謝して居る次第です。私には、私の心の中に母は何時までも、何時でも生きてゐるようにさえ思はれます。

斯くの如く母を想うて、父母恩重經を讀んでいますと、經典の一句／＼私の胸を打つものがあります。

誠に父母ありてこそ、今日の私があるのです。私の今日あるは全く父のお蔭、母の情の賜であります。

母を想ひ、微力ながら無我寛宏に務め、念佛精進致したいと存じています。



行 紀 四 国

子 治 藤 佐



道後温泉

驛頭にて二人を招いて下さつた二宮、松木
兩家の方々に迎へられて私達の車は有名な、
道後温泉の大和屋別荘へ向つた。

丹ぜんを着てタオルをさげてゐる湯治客の
歩るいてゐる町を抜け、小高い松山城を遙か
に、そして市中が一望に見渡せる一室へおち
ついた。

普通の温泉と異り内湯がない。町のほとん
どに立派な三階建の建物が温泉場なのであ
る。處々の入口に「靈の湯」とか「さぎの湯」
とかかいてある。

宿より切符をもらひ「靈の湯」へ行つた。
中の大規模なのに先づおどろく。女湯はひつ
そりして溢れるばかりのお湯に旅の疲れをと
つた。湯質もよく手足がつる／＼する様だ。

町の人達は底が砂になつてゐる大風呂へゾ
ロ／＼入つて行くのはまことに珍らしかつた
し一寸異風景である。勤め歸へりの人はカバ
ンを持つたまゝ、自轉車で來た人の爲には預
り所もあり、いつも澤山並んでゐた。三回目
に行つた時はあまりきれいなのでハンカチな

どそつと、洗つてみた。一番氣に入つた事は
熱海などとちがつて静かな町でバチンコやの
他は、お菓子や、土産物や、タオルを賣つて
ゐる店が多いが、お客を呼びこみもしなけれ
ば、大きなラジオの音やレコードでガン／＼
してゐないことであつた。お湯には魅力の少
ない私でも、こゝの町とお湯は大變好きにな
つてしまつた。

茶屋のおばさん

道後でお茶がどうもまづいと云ふのでひま
を幸に松山市の大街道と云ふにぎやかな通へ
出てみた。すぐに洒落れたお茶屋がみつかつ
たので入つて行くとさつぱりとしたみなりの
おばさんが愛想よく迎へてくれた。

お茶をほしいと云ふと旅の者と分つて「ど
ちらにいらしてます？」ときいたので道後と
云ふと「あゝ、あそこはお茶は上手にでませ
んからあまりよいお茶をもつていらしても駄
目でせう。まあ一服していらつしやい」と云
つてお煎茶のあざやかな手まへで玉露を入れ
てくれた。机の上にあつたお菓子も「何卒」
と出してくれた。このお茶が實においしかつ

た。翌日再び訪れた。今度はお菓子を持つて「お婆さん、お茶のませてね」と入つて行つた。その日は「奥さんおうす上げませう」とおうすをたてゝくれた。伊豫がすりの上つぱりを着て美人ではないけれどあかぬけのした人で、氣性もさば／＼してゐた。すつかり仲よしになつて三十分以上も話し込んでしまつた。

二度しか會ふ事が出来なかつたけれど懐しい「お婆さん」であつた。

子規堂

松山市内或は道後に子規或ひは門下の俳人の句碑が方々に建てられてゐる。子規堂は故人が住まつて居られた家の間取そのまゝに建てられてゐた。戦災にあひ、一度は火事の爲焼失して三度目に建てた物で、正宗寺の境内にあつた。その日は多ざれの重い日であつた。

御本堂からは讀經の聲が流れて來てゐた。

大きなテーブルに子規の筆になる本など次々に奥さんの手によつてならべられた。

子規の着てゐられた着物の端し布や布圍の

布地の一端まで丁寧に保存されてゐた。

俳句をたしなむ私ながら、色々拜見しても



何ら親しみも興奮もわからない。大きなテーブルにおいた手がシン／＼と冷えをおぼえるの

み。子規が今日なほ生けるが如くあるのは虚子先生がホトトギスを今日の様にあらしめられた御力のおかげではなからうか。お堂の前に建てられた大きな碑にかゝれた虚子先生の筆跡を仰ぎ見た時、先生の溫顔が懐しく、思はず泌々と碑に近づき暫く佇んでゐた。

結 婚 式

私達が遙々松山まで來たのは二宮さんの結婚式の媒酌をする爲であつた。

戦争の激しい時、彼は木更津の航空隊に少尉として勤務されてゐた。横須賀へ出張する時、私の寺へ來て泊られるのが常であつた。東大を出られた彼は眞面目な静かなインテリ少尉であつた。特別何をして上げたと言ふ事もなかつたけれど家の者達と一緒に食事を共にし語り合ふ間に何らか宗教的雰圍氣を感じとられる所があつたらしい。或る夜、警戒警報發令中突然たずねて來られた。その頃主人は出征して九州へ行つたらしいと云ふ噂を聞いただけで便りもなく問ひ合はせる便もなかつた。彼は「急に朝鮮へ命令の爲、行きませ。部隊を探してをぢさんの居所をつきとめ

て上げたいし傳言もして上げたい。何か持つて行きませう。私は部下が荷物をもつて東京驛で待つてゐるからすぐ引き返へします」との事。おどろいて私は日用品少々といくらかのお金とで小さい包を作り夢中になつて御願ひした。終戦後二三年して彼は初めて上京したとて寺へ來られた。「をばさんお約束を果せなくてすみません。門司で終戦になり混亂して部隊を探す事も出来ませんでした。これは、お預りの品です」と云つて始終ポケットに入れておかれたにちがいないと思はれるボロ／＼になつた小さい包を私の前に返へされた。何と云ふ責任感の強い人であらう。私は言葉もなく涙と共にそれを受けとつた。

その後、秋には毎年柿を澤山に「御本尊に供へて下さい」と云つて送つてくれる。

松山で勤められる様になつて私共の寺へ來られることも無い中に宗教を求めキリスト教へ入られた。そして結婚式を挙げる時には、是非「尊敬してゐるお二人に仲人をして頂きたい」と私達には勿體ない言い分でしたが、どんな遠方でも彼の誠實はヒューマニテイに對して飛んで行つて上げたい氣があつた。

これが松山へ行く動機であつた。そして私達二人は教會の入口に立つたのである。

この事については色々問題もあらうが、私達によつて宗教的生活をされる原因の一端ともなつたと云ふ事であるし、佛教を尊敬してくれる彼の宗教性に對して宗派をはなれて信仰に生きる二宮さんの結婚へのスタートを祝福して上げたいのが私達の偽はらない氣持であり、新婦と並んで靜々と敷かれた白い布をふんで進んで行く時私は感慨無量であつた。この式では、キリスト教の式と云ふことなく彼のヒューマニテイを通して私達は感激したのであつた。

歸路

翌朝五時高松港へ入港した。末だ暗い市内を電車の停留所へ行き、金刀比羅神社へおまゐりした。それから長い間の念願であつた佛性山法然寺へも行つた。

法然上人が流罪にとわれ淋しいこの島の一隅であつたにちがひないこの地で配所の月をどんな御心持で眺められた事であらうか。一度は參詣したい。と前から云つてゐた主人の

念願はこゝに果されたのである。落葉をふんで山の中腹に佇んでゐ乍らこの廣い淨土宗の宗寶を靜にお守りされるこのお寺の在り方と午前中參拜した金刀比羅神社の寄附の燈ろが澤山あつた事や何萬と云ふ金額と寄附者の名前をほりつけた石が參道にズラリと並んでゐた派出さを思はず思ひ浮べずにはいられなかつた。

その夜は屋島山上に泊り、翌日栗林公園を一廻りした。形よい山を背に松の生ひ茂つた公園も名庭園と云ふに過ぎず、やはり私達は念佛の徒である爲かあの靜かな法然寺に於て七百年前に法念上人が呼吸していらした空氣を吸ひその中に、血の中に脈々としてうつてゐる信仰をゆり動かさずにはおかない。そのつながりが比べるべくもなく大きく且つ無限に展がつてゐることなどを考へてゐるうちに暮れて行く四國の島影を後に感慨無量の私達をのせた船は一路神戸へと波をけたてゝ進んでゐた。(鎌倉、大佛住職夫人)

x

x

x

x

x

歌舞伎の中には、色々とお家騒動を扱つたものがあります。今でも「鏡山」「伊達騒動」「薄雪物語」が、たまに通しで上演されてゐますが、これ等は江戸時代には「彌生狂言」として、一、二月の春芝居に次いで上場されたものです。

それは三月と言ふ月が、當時諸大名へ奥勤めをしてゐた婦人達の年に一度の宿下りをする時で、それ等の御殿女中が、唯一つの楽しみにしてゐたのが、芝居見物であつたのです。そこで何處の小屋でもそれを當込んで、彼女達と直接關係のある、大名生活を描いた劇を上演したのです。當時の女性がいかに役者に憧れてゐたかは、一寸我々の想像のほかだつた様です。棧敷に並んだ婦人達は、おのれの姿を美しい役者達の扮装によつて眼の前に見て、言ひしれぬ自己陶醉に耽つたのでせう。この月ばかりは、芝居小屋は女の天下であつたのです。

あつたのです。

これ等の「お家狂言」は、皆それ〴〵幾段にも別れた長い長い芝居ですが、その發端である序幕が大體參詣だとか花見、それに鷹狩と決つてゐるのが一つの特色です。その中でも「花見」は、彌生芝居の雰囲気はこの上なく誘つてくれる點で、私の大好きな場面です。「鏡山」「薄雪物語」はそれ



彌生芝居

と唄に合せて、様々な人物が出入りして行く、それだけで結構楽しいのです。それは裝置とか、鳴物とか、唄と共に、登場人物すべてが一群の「花」になつてゐるからでせう。この時程、實に花道が巧く使はれてゐるのに、誰でも氣が附きます。そしてそこに咲亂れる善人悪人の花々から、観客はこれから綾なされる複雑な筋の展開を

ですが、その場所は臺本によつて淺草觀音とか、清水とか、長谷寺と言ふ風に色々異つてゐます。しかしそんな違ひはどうでもよいので、要するにお姫様が澤山の腰元をつれて出てくれば、場所は何處であらうとかまはなかつた譯です。たゞ舞臺に描き出された春景色に、観客が酔へばよいのです。下座から聞へてくる賑やかな鳴物

暗示させられるのです。

又、お家に傳はる寶物が、たへずストリームの陰で糸を引き、善人悪人を操つて、勸善懲惡の結末へと巧みに運んで行くのも、「お家狂言」には缺くべからざる條件でせう。今の我々にはそんな技巧は、一寸馬鹿々々しく感ぜられるかもしれませんが。しかし考へ様によつては、あんな素晴らしいテク

ニッ、クはないとも言へるでせう。これはあらゆる劇作への、アルファベツト、かもしれません。そしてそれは、これ等の物語に忠義な女主人公を多く登場させ、隨所に「女の忠臣蔵」を觀せてくれる事と一緒に、面白い特色です。

近頃ではこれ等の芝居が、彌生興行の舞臺に掛かるとは限りません。それは時代の要求が、もつと廣い視野に立つて、歌舞伎と言ふ藝術を眺めてゐるからで、何ら差支へない事でせう。けれどもこの一連の「お家物」は、「彌生狂言」としての特異性を考へずには語れない、多くのものを持つてゐる事も、忘れたくありません。

(梅津和夫)



古 寺 め ぐ り

庵 教 慈

大 橋 俊 雄

閑の地を占めて、波濤の音をかすかに、前方富士の靈峯をながめる勝地に建てられている。幼な心にも聞かされた慈教庵の方が、本眞寺よりも響がよいための庵號を唱えている人が案外に多いようだ。

始め寺は、佛法興隆のために、こゝから南五丁の、渚に近い松林の間にある細川さんの別邸の一隅に建てられたのが、そもぐの初めで、明治三十六年のことであつたそうだ。話はその昔にさかのぼる。庵主正戒尼は、

目白の雲照律師と開山様（本眞尼のこと）

は令弟善苗師が律師のお弟子になつて居られたことゝまた明治廿九年の三陸海瀆に互助をうけられてから後は、一入親しくなられたようで、その関係もあつて律師の主宰せられていた正法會員の方々とも親しくして居られ、格別の援助を受けられて居りました。その頃、誰云うともなく有難い老尼を東京近くにお迎えしたいと申され、律師の信徒であつた細川いと子様は、是非鶴沼の別荘の一部五百坪を供養するから、一寺を建てゝ欲しいと態々三河まで来て願われ

たので、其の心にうごかされ、意を決されたようです。鶴沼に着いてみると十年程前に見た夢の光景と似ているのにおどろき、この地こそ有縁の地であるぞと云われて一寺を建てられたのでした。

と開創の由來を物語られ、「それから丁度今年が五十年目になりますので、四月末に五重勸誡をつとめさせていたゞきました。」と語られた。

がつしりとした落ち着きのある本堂、清淨な庫裡書院、そして地藏尊の配置は調和のとれた莊嚴な趣きをそえている。本堂は關通型の建築様式で、周りに五尺巾の廊を設け、向拜はなく、全體に角型を斥け、丸味を帯びた質素簡潔な堂宇である。進んで堂内に入れば金色まばゆい阿彌陀如來の坐像が、柔和のまなざしを衆生の眼にそゝいでいる。如來様は三河の丹羽さんと云う方が一刀三禮の誠をもつてお彫りしたもので、關東大震災の折にも天井板を打ち破つて泰然と、不思議にも何の傷一つおわずに無事に起立して居られたそうである。

隠れた慈善家で、道心堅固の徳行者として世人の歸依を受けられた本眞老尼が、みまかりましてから二十五年の歳月がすぎた。老尼の宗教的人格の偉大さは、老尼を知る人々によつて今に語りつがれ、身の自己反省の糧ともなつていのである。その老尼が建てられた尼寺本眞寺は東海道線の藤澤で、小田急に乗りかえた本鶴沼の驛近く、清淨靜

「不思議と云えば不思議でした。」とその頃老尼と共に居つた正戒尼は追懷して居られ、この時若しも、如來様が損傷でも受けて居られたら、再建せられはしなかつたとの由である。しかしこれを機として寺は北方に移されるようになった。それについて、

開山様は色々な信仰をもつて居りました。何か心配事や。種々の意見が出て自からきめることが出来ないときは、籤によつて如來様の意見を聞くのを常として居りました。雲照律師の信者であつた和田元右衛門という人は、開創して數年後、渚に近く建てられているのは余りよくないから、後方へ移されては如何ですかと申し上げたところ、(イ)今すぐ移轉するか、(ロ)二十年後に移轉した方がよいか、(ハ)永久に移轉しないがよいか、(ニ)どれも佛意にかまわなにかの四本のくじをつくつて、佛前で祈念し、引いた所二十年後の移轉がよいと出て來たので、此時にはそのままにし、立ち合つた人々も忘れ去つてしまつていた。所が震災後、立ち合つた人達が鶴沼に集つて以前こんなこともあつたと云うことが誰云うともなくいはれ、思い切つて今の地に移す

ことになつたのです。それに、海邊近くでは浪波の心配もあるし、教化も人家に程近い所がよいものですから。

と語られる僧の心は明るい。そして強い意志と信念とをもつて、老尼の徳を慕いつゝ、教化に精進されているさまは尊い。

「以前は日曜講演などを開いて、大島御前様

や矢吹先生等からお話をしていたよかったです。」

「皆當作佛」の雲照律師の扁額や杉山大運和尚の「堪忍」の額は、老尼が律院に育ち、律儀の生活を送つたこと、思い合せて、感慨深く黄昏せまる頃「不許葷酒入山門」の標石を後に門を出た。海岸から吹きよせる風は冷く身をつんざくばかり、冬の氣配はこんなところにもたゞよつていた。





阿彌陀經の話 (八)

藤井實應

「舍利佛、少善根福德の因縁を以て彼の國に生ずることを得べからず。舍利佛、若し善男子善女人ありて、名號を執持し、若くは一日、若くは二日、若くは三日、若くは四日、若くは五日、若くは六日、若くは七日、一心不亂なれば、其の人命終る時に臨みて阿彌陀佛諸の聖衆と與に現に其前に存す。是の人終る時、心顛倒せず、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得。」

念佛往生——前に、「願を發して極樂に生れたいと願え」と勧められたので、ここにはその極樂に生れる道をお説きになつたのであります。極樂に生れるには小善根福德では生れることは出来ないのがあります。小善根福德というのは、念佛の無い雜善根、功德修行を申します。殺生をしない、物を盜まぬ、人に施しをする、社會事業をやるなど、みなそれぞれ善い事であり、進んで爲すべきことではありますが、縁に随つていろいろの善を爲すだけでは極樂に生れることはできません。それらはみな小善根の福德であるからです。それでは極樂に生れることのできる大善根福德とは何かというに、「阿彌陀佛を説くを聞きて名號を執持して」とあるがそれで、「執持名號とは此れ正しく念佛を修するなり」と法然上人が釋されました如く、阿彌陀佛の事を聞き、阿彌陀佛の極樂に生れたいと願うて南無阿彌陀佛を申すことであります。阿彌陀佛に身も心も生活もすべてをさへげて、そのみ心を心とする念佛の生活は、佛法の大精神たる無我の生活であります。無我を體現せずして、我のはからいの中で作す善根は如何に等しいようでも小善根となります。小善根といわるゝものも、たゞこの大善根たる念佛につながりができると、念佛におさめられて大善根福德の中味となるのであります。念佛の中に、ほどこしをしたり、社會事業をしたりすれば、それは念佛大善根の中実となります。それゆえ、すべての事を念佛を中心として念佛の中に爲すように心がくべきであります。

善男子善女子ということは佛教を信ずる男女ということでありま
す。若くは一日乃至七日ということは、日を限つたことではありません
せん。善導大師は「上は一形をつくし、下は十聲一聲に至る」と解
釋せられました。即ち一日乃至七日ということは、つゞめていえば
一念一聲、長くのばせば一生涯ということで、一聲でも念佛するも
のは阿彌陀佛は臨終に諸の聖衆と共に迎え下されて淨土に生れさ
せて下さる。もし命長らえたならば、その一聲の念佛は、十聲とな
り、百聲となり、一日、七日、一月、一年、十年となり乃至一生涯
(一形)の念佛となるのであります。即ち一日乃至七日は「どれほ
どでも」の意となります。時節の久しいか近いかを問わないことで
あります。それゆえ「一念に一度の往生をあておきたまえる本願な
れば、念々ごとに往生の業となるなり。」また「行は一念十念むなし
からずと信じて無間に修すべし」との法然上人の御教えの如く、執
持名號、念佛を相續することが大切であります。

次に「一心不亂」とは「念佛するとき心散亂せず至誠至信に専ら
佛名を稱うること也」と法然上人が釋せられました。余方へ心を散
らさず、他の善根に眼をかけないで、たゞ阿彌陀佛を信じ、すべて
をうちまかせて、稱名することでもあります。

前に述べられた極樂の依報の莊嚴も本願によつて成就されたもの
であり(四十八願莊嚴起と善導大師は仰せられました)、阿彌陀佛も
本願を成就して成りたもうた本願成就身であられ、そしてわれらが

往生のできるのも本願(第十八願)成就の名號によるのであります。
かように極樂莊嚴、阿彌陀佛、本願、名號、われらの往生等、みな
不離一體の關係にあります。善導大師が一々誓願爲衆生と申された
如く、極樂を構えられたことも、阿彌陀佛となりたもうたことも、
四十八の本願も、みなわれら衆生が念佛して往生せしめんが爲であ
つたことに深く思いを致さねばならぬと思います。

「命終の時に臨んで」の「臨命終時」は時宗(開祖一遍上人)が
この文に據つてその宗名としたほど大切な印文であります。私たち
は、諸行無常の世に處する上からには平生の念佛が、いつ臨終の念
佛となるかも分りません。それ故平生即臨終、臨終即平生、と心得
て、行住坐臥に念佛を相續することが大切なうけとり方であります
念佛申すものは、命終に臨み、阿彌陀佛のお迎えをうけて、心顛倒
せず、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することができ、阿彌陀佛
のお迎えをうけるから、心も顛倒しないで淨土に生れることができ
るのであります。われわれはたゞ執持名號、一心不亂に平生即臨終
と心得て、南無阿彌陀佛と申して精進するばかりであります。平生
即臨終と心得るのであるが、臨終が延びれば平生となるのですから
これを分けていえば平生には如來光明中にお導きお育てを頂き(光
明攝化)、臨終には如來の來迎をうけて極樂に生れさせて頂く(往生
極樂)ということになるのであります。

「舍利佛、我れ是の利を見るが故に此の言を説く、若し衆生ありて是の説を聞かんものはまさに發願して彼の國土に生ずべし。」

自證——念佛往生の誠であることを、釋尊自ら證明せられて「我れ是の利を見るが故に此の言を説く」

と仰せられるのであります。即ち念佛申せば、必ず阿彌陀佛の極樂國土に生れることができる、我は是の大利であることを知るが故にかように説いてきたのであるとの仰せです。實に此の佛陀の強き御自信からのお言葉を、私たちは素直に信受せねばなりません。

願生の心——釋尊は「若し衆生ありて、此の説を聞かんものは、まさに發願して彼の國土に生ずべし」とお勸めになります。こゝにもまた聞と願とが重ねて述べられました。阿彌陀佛を聞いて願生の心を發すのであります。即ちその願は眞實の願いであります。阿彌陀佛の御國に生れ、阿彌陀佛の如き佛とならんとする眞實の大願を發すのであります。この大願に生きて念佛申す者にとつて、此世の悩みもみな此の大願成就の糧となり力となつてゆきます。願があり理想がある者の生活は、日々の生活が悉くその目標歸趣への道程として樂しまれてゆくのであります。願をもつておれば、死んでも殺されても進まんとつ勇氣も出てまいります。阿彌陀佛が法藏菩薩の時大願を發されて、この大願成就のためには「たとひ身を諸の苦毒の中に止むとも、我が行は精進にして忍んで終に悔いざらん」と誓われました。眞實の大願、極樂に往生して成佛せんとの大願をもつ念

佛者は、又この法藏菩薩の大精進に學びゆく生活となるのであります。

「舍利佛、我れ今阿彌陀佛の不可思議功德を讚歎する如く、東方にも亦阿閼鞞佛、須彌相佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛、是の如き等の恒阿沙數の諸佛有して、各其の國に於いて、廣長の舌相を出して、遍く三千世界に覆いて誠實の言を説きたもう、汝等衆生、當に是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信ずべしと。」

(以下略)

(次に南方世界、西方世界、北方世界、上方世界、下方世界にもそれぞれ諸佛ましまして同じく認識したもうことが示されてい

る)

諸佛證誠——釋尊は極樂のこと、阿彌陀佛のこと、その極樂に往生するゝ道、即ち念佛のことについて順次お説きになり、自ら説いたことの誠なることを自ら證明して念佛を勧められたのであります。が、今、釋尊が阿彌陀佛のお徳を讚歎せらるゝが如く、六方の諸佛も同じように阿彌陀佛のお徳を讚歎し、この説法の誠なることを證明しておられるとお説きになります。これを六方段と申して、淨土教列祖の人々は、この阿彌陀經を六方諸佛證明の教と見られ、諸佛證誠を此經の主なお相として味われております。東、南、西、北、上、下の六方に、各々ガンジス河の沙ほどのたくさん諸佛ましま

して、今、釋尊が阿彌陀佛を稱め讃えるように、各々その世界に於て、大きな舌を出し、その舌で遍く三千大千世界即ち全宇宙を覆うて（これは佛のお言葉を形容したもの）誠實の言葉を以て説法される「汝ら衆生よ、まさに彼の阿彌陀佛の不可思議な功徳をほめたゝえるところの『一切諸佛所護念經』を信ぜよ」と。前後、左右、上下何れからも、阿彌陀佛を稱讃する聲が聞えます。疑い深い私たちに信を生ぜしめんが爲に釋尊ばかりでなく、六方恒沙の諸佛も證誠せられているのであります。

一佛釋尊の讃歎せられていることを六方の諸佛もまた讃歎したもうことは、諸佛の大悲は彌陀と同體であることを示されるもので、ひろやかな豊かなうちとけあうた佛の世界がおがまれるのであります。阿彌陀佛を信ずることは、一切諸佛を捨て、阿彌陀佛を信ずることではなく、阿彌陀佛を信ずることが、そのまゝ一切諸佛のみ心にかなりことであります。佛教はこのひろやかなゆたかな思想信念を持つものであります。たゞ、諸佛同體であるからとて、あの佛この佛と轉々と拜み歩くことではありません、直接信ずるところは阿彌陀佛一佛で、一心不亂、一すじの道を進む、そこから心も開けて諸佛のみ心にもかなうことができるようになるのであります。

「一切諸佛所護念經を信ずべし」と六方諸佛も聲をそろえて勧められています。それは即ち彌陀の名號を執持して、極樂國土に生れ俱會一處のよろこびを得よとのお勧めであります。われわれが釋尊

及び六方諸佛の誠實の言葉を信じて、念佛申して阿彌陀佛のみ國に生れんと願えば、このわれわれを一切諸佛は護り念じ給うて下さるのであります。

(つゞく)

淨土俳壇

高木晴子先生選

寒燈の下關の花ばらの花

高木晴子

五ツ目の冬の灯を消し眠り

上野章子

立春を明日にひかへし冬日かな

早見君子

山火事の晝のさわぎに寒からず

梅村うき子

かげろふの立つあり遠き屋根瓦

岩田 楓

枯芝のどこか縁と歩きつゝ

米山よし

椿落つ又落ちたるを氣にしつゝ

久保田みほ子

今ひざにありし冬日と思ひしに

佐藤初瀬

○~~~~~○

○季題 新茶、麥の秋（五月號）蟻、柿の花（六月

號）毎月十日締切、送先、淨土編輯部宛

○讀者の方からどしどし投稿を頂いて居ります。四月號より掲載させて頂きます。

インドの國旗

ネー ル

インドの歴史の話になりますが、我が國旗についてある輪この輪を私共は新しい國旗に採り入れたのですが、インドの非常に古い象徴であることを申し上げたら興味深く思われるでしょう。それは法輪（法は宇宙の理法。釋尊の教は宇宙の理法をのべるもので、その宣布力は日輪の赴く所何ものも抗することの出来ないと同じ力をもつといふ意味で法輪という。）と呼ばれます。それは二千年以上昔に用いられました。それ

以上どの位からのものかは知りませんが、特にアソカ王（註、西紀前二七二—二三二、中印度マガタ國の君主。廣大な王國を建設したが、佛教に歸依しその治世は道德と政治との一致した古今稀なものといわれてゐる。）によつて用いられました。この佛教徒の王は、征服と勝利の最高潮において自分は勝利を得ながら多くの人を殺してゐるという事に突如氣付き、戰爭を中止したといふ史上類稀な王ですが彼はこの時申しました「最早予はこのような戦はしまい。未來は法の宣布の爲に闘うのみである！」と。かくて法輪が彼の象徴になつたのです。

今もインド中至る所に、アソカ王が二千年以上前の人々に「正しくあれ」「忍耐強くあれ」等々と呼びかけた碑文を記した大きな塔碑がみられます、私共は單にインドの古い精神のみならず、インドの傳統的文化を代表するものとして彼の象徴を考へました。私共は今日の新しい動的な我がイン

ドに於てこの象徴を忘れたくなかつたのです。それは私共が古い文化的哲學的なインドの姿、その平和に満ちた姿を今日の活動的な精神と出来るだけ結び付けたいと念願するからに他なりません。

どこ迄これが成功するかは知りません。兎に角それが私共の努力目標なのです。私共は眞に偉大な事を他のお蔭なしに爲しとげるといふようなことは一國の力の及ぶ所でないことをよく知つております。一方、いかなる國も自己の力によらねば進歩し得ないことをよく知つています。人は他人に支えてもらうことは出来ません。私共は先頭を切ろうとすれば自分の脚で立ち一心に働かねばなりません。もとより他の方々も私共を助けて下さり、私共も亦その方々のお力になることが出来るでしょう。しかし結局大切なものは私共自身の奮闘であると思ふのであります。（ネール著井上譯「自由と平和への道」より）



小説 吉水 (八)

東山未知夫

別離

保延七年は七月十日に改元となり、永治元年と稱ばれるようになった。

父を失つた勢至丸は母と共に淋しい日々を送っていた。しかし、父の遺言は勢至丸の耳底に常に生きていたのである。父なき後の淋しさは、この耳底の聲によつて次第に消されて行つた。父は亡くなつて了つたのではない。勢至丸の耳の底にその聲が現に生きているのである。

勢至丸は父の聲に勵まされて、一刻も早く父の遺言を實行しようと思つていた。

一方、母の秦氏もまた、亡夫の遺言を常に心にかけていた。しかし、秦氏は女としての、母としての弱さがあつた。夫に先立たれた女のみじめさ、頼りなさを身にひし／＼と感じていたのである。荒野の中に突きはなされたような、今まで頼りにしていた支柱を奪ひ

去られたような、世の中に見捨てられ獨り取り残されたような淋しさを全身で感じていたのである。夫なき今は、自己の孤獨の淋しさをまぎらせて呉れる者は、たゞ亡き夫の忘れ形見——勢至丸——だけである。いつ／＼までも勢至丸を膝元に置いて共に暮したい。勢至丸を手放したくない。夫と死別した自分の孤獨をなくさめてくれる唯一の頼りである勢至丸と別れることは、本當に母にとつては、身を切られるようにつらいのである。

夫の遺言は必ず守らねばならない。遺言を守るといふことは、勢至丸を母の手元から離して出家させることである。しかし女の弱さ母の弱さは、どうしても勢至丸との別離の淋しさをしのぶことが出来ないのである。

「どうすればいいのやら。」
母は、来る日も、来る日も、夫の遺言と母としての人間の情との相剋に悩んでいた。

或る日のことである。もう秋の氣配がどことなく感じとれるよう

な晩夏の午後である。西の庭、棕の木あたりでひぐらしが鳴いた。そして消え入るように鳴き止んで行つた。

勢至丸母子は、父が息を引き取つて行つた内佛の間で、母一人、子一人の水入らずの談話を交わしている。母は、遺言の履行を一人で決めかねているのである。一度勢至丸に聞いて見たいのである。そして、勢至丸の氣持次第で、母も何とか決心したいのである。

「勢至丸や。」

「はい。」

「ととさまの御遺言のことじゃが……。」

「丸は、早く御遺言を果しとうござりまする。」

「まだ、九歳というに、一人で淋しくはおじやらぬか？」

「いゝえ、私にはいつも父上様が、そしてみ佛さまと一緒におられまする。」

「そなたは淋しくなからうが、この母はどうするのじや。母はひとりぼつちになつて淋しいことよ。」

「母上、どうか云われまするな。母上がそのようにお云いやれば私の心も鈍りまする。」

「勢至丸や、こちらをお向き。」

「……………」

「おゝ、よく似ておじやること。その目もとは亡き父上にそのまゝじや。」

「父上に別れ、今またその形見のそなたに別れねばならぬとは。」
「母上、もうよされませぬか。……あれ、涙を流しておいやる……。」

「……………」

「私は母上をうとんじ奉るものではありません。父上の御遺言を果すことが、そしてみ佛の道に入つて人々が皆救われて行くことが、これが一番大きな母上への孝養と存じまする。」

「勢至丸や、ではどうしても、御遺言を守つて佛道に入ると云いやるか。」

「はい、私はもう決心しておりまする。」

「それほどの御決心ならば、母も反對致しませぬ。して寺へお入りなら、なるべくこの母の身に近い寺へ入つてくりやらぬか。」

「はい。」

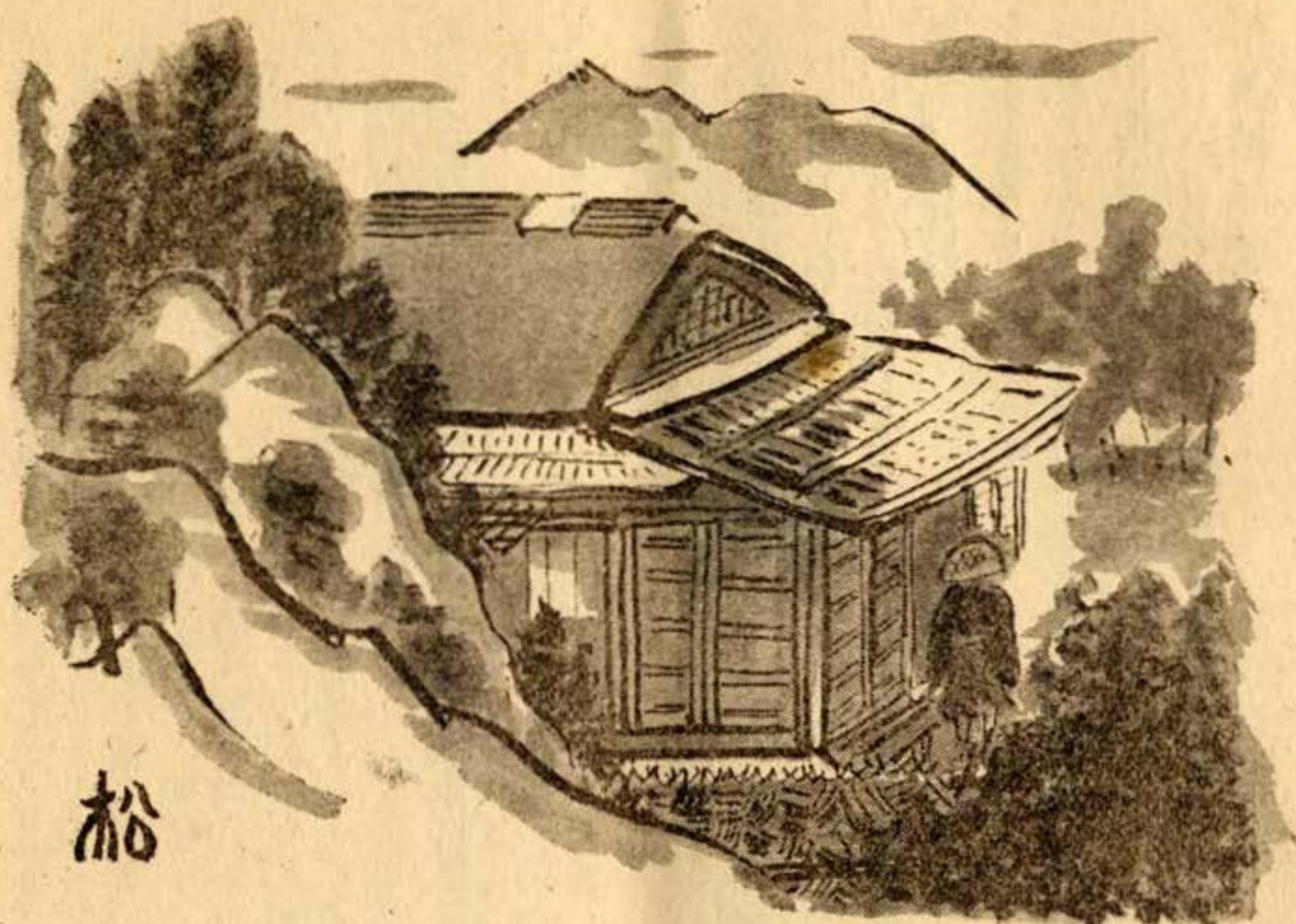
「母の弟がいま院主をしている寺がある。」

「……………」

「觀覺得業という人よ。此の邊りでは『ひさしの得業』と呼んでいるが……。」

「ひさしの得業？……」

「その觀覺という人は、はじめ延暦寺で學問されていた。ところが叡山では學問修業が成就されなかつたので、さらに奈良まで出かけて行つて、法相宗の學問をされ、とう／＼修行を成就して得業に



松

なられたよしぞ。永い間かかつて得業となられたゆえ『ひさしの得業』と呼ばれておじやる。」

「なるほど……。随分御修業なさつたことでしよう。」

「その観覺さまが。私の弟ぞ。だから勢至丸には叔父様に當る人じゃ。」

「して、観覺様のお寺は？」

「此處から東北へ十里ばかり行けば、菩提寺という山寺がある。」

観覺さまは、その院主をしておじやる。」

「では、その観覺さまのもとへまいります。」

「観覺さまなら私の弟じゃ。十里ばかり離れてはいても、身内じやほどに、またいろいろと便宜もあることじやから、私もそなたの動靜を聞くことが出来る。」

「私も又、折を見ては、母上様にお會いしに歸つて参りましよう。」

「それでは一度、明日にでも家中の者を遣つて、観覺さまの御都合をお尋ねしよう。いや、それよりも、観覺さまにお出かけを願うことにしよう。」

母子の語らひい一應落ちつくところに落ちついた。今までは聞えなかつたが、ひぐらしの聲がまたひとしきり鳴きつづいた。今度はその聲に應じて、少し場所を変えてまた別なのが鳴いた。長い夏の午後ではあるが、陽が餘程西へ傾いたのか棕の木の大きな影が、そ

の全體の輪廓を邸の屋根一面に落している。

それから數日が過ぎた。

「もの申さむ！」

表の方から大聲で案内を乞う聲がする。

「どうれ！」

邸従の一人がこれに應じた。

「貧道は觀覺と申すもの、ご案内を願う。」

餘りの大聲なので、その聲が靜寂な邸の奥の奥まで突抜けに聞えて來た。

「おお、觀覺どの……」

秦氏は急いで走り出て來た。

「ようこそお出になりました。實は當方より參上致すべきところ何分女子供のことゆえ、つい御無禮を申上げ、わざ／＼當方までお呼び立て申し、失禮の段はひらに御宥るしを……。」

「いや、さような物堅いことは、……。して今日は勢至菩薩を頂戴に上つたのだが。」

「勢至菩薩？」

「勢至菩薩さ。はっはっは。ところで菩薩はどこにおじやる？」

「叔父さま、今日は——」

「おゝ、おじやつた、／＼。勢至丸、いや、勢至菩薩がおじやつたて。」

觀覺は生來磊落な人である。そして又、時々意想外なシヤレを飛ばして人を笑わせるのが得意である。觀覺が來ると、家中が急に明るくはがらかなるのである。今日も早速勢至「菩薩」というシヤレが飛び出してゐる。

しかし、觀覺も又、纖細な心のふるえを把えることの出来る細い神經も持つてゐる。數日前に姉なる秦氏からの書面を受取つて、勢至丸母子の事態及び姉者人の心痛をちゃんと知つてゐた。今日、勢至丸を伴つて歸ることは、きつと秦氏の心を悲しくさせるにちがいない。従つて今日は、かまえて、かまえて陽氣に振舞つてゐるのである。姉者人の心を滅入らせてはならない。別離は何人にとつても悲しいものである。その悲しみを、故意にでも陽氣に振舞つて、忘れさせようとしてゐるのである。そこで觀覺は最初から大きな聲でいやに景氣よく訪れたのであつた。

「して觀覺どの、今日、勢至丸を連れて行かれると云いやるか？」
「おお、一日も早く勢至丸、いやさ、勢至菩薩と法友になりたくての。」

「せめて今日一日にても猶豫して下さるまいかの。母一人、子一人が今日限り別れて暮すと思へば、私は切なくての。今夜は、ゆつくりと母子の最後の一夜を過したいのじや。觀覺どの、今夜は當宅で御逗留あれ。そして明日、勢至丸を伴つて出發して下さい。」

讀者の聲

○二月號「獄中の讀者より」の山田様の御感想うれしく拜見しました。戦争のため何かと御苦勞なされた方々へは、心から申譯なく存じています。山田様が幸福になられます事を祈つています。

村田嘉久子

○御誌の諸先生方は、一家族の様な身近かさを感じ、芝園だよりは肉親の心地致して先づ拜見いたしています。

佐賀縣北多久町 於保 郁

○浄土、心の糧に頂いています。當地、本土の西端、五島の一寒村で、風光明媚ですが未開地です。心田開拓者として念佛弘通はげんでいます。

長崎縣 有川町 藤野定光

○浄土、大變むずかしくなつた様です。兵庫縣 船城村 豊島眞成

芝園だより

○今年の節分も好晴に恵まれて、どここの神社もお寺も、豆まきは戦後最高の人出であつたそう。こういうお祭り騒ぎの催しだと多勢の人が集つてくるが、ほんとうに純正な信仰には容易に人は集つてこない。現世利益を看板に人を集めるのはやさしいが、純正佛教を徹底することが如何に難しいか、を思わざるを得ない。しかし私はこの頃いろいろな庶民の勝手な、現世利益的な祈願も、そのままに放つて置いてはいけないと思うようになった。他愛のない民俗信仰の中にも、純正信仰への道がいくらか求められるであろう。

(佐藤賢順)

○デパートの廣告で一方が「買物上手は家庭の幸福」と言へば他方は「これが本當の買物上手」と言ふ。週刊誌に依ると前者は現に斯界の王座にある古豪で後者は今特に其れを追抜かんとする状態だとの由。此の廣告文の「買物上手」

の四字を「宗教」の二字に變へたら何かを意味しはしないか。

(佐藤密雄)

○英國では耐乏生活で、肉一片が仲々だと言う。日本人は幸福だ。ゆつくり美術を鑑賞して、一應満腹出来るのだから。さて、それでも何か足りぬ様な空虚を感じるの何故だろう。そう。未だ自分のものが本當にないからだ。考えてみれば獨立とは名のみだもの。雑誌浄土にも、もつと自分のものをつくりたい。

○竹中先生「法然上人御法語」をN・H・Kから放送、大好評。中村孝也博士より「一丈の堀を一丈五尺と心得て、反省いたしたく」と、御感想。

○讀者の聲がどんどん来る。編輯室と血が通ふ様で嬉しい。

○龍海坊の眼はよくなつて來ました。大變な見舞ひ狀が來て、本人驚いています。(安居)

○小石川の嚴淨院さん來所。御特志頂き、大鞭鞭。大叱咤。有難く

拜聴。

○鎌倉の佐藤治子様、陰に陽に本會に御聲援。姉上の御追善にと金一封を頂く。厚く御禮申しあげます。

○目も治り、春の芽も出て來ました。これから頑張りますからよろしく。(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(十共)。毎號定價三十圓(十共)、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「浄土」 三月號

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可

昭和廿八年二月廿五日印刷 昭和廿八年三月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順

發行人 眞野正順

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京都千代田區神田保町一ノ十

電話・芝(四三)一三二八

團體宿泊御案内

團參者の御宿泊を十人以上百人位まで實費(二百圓より)で御引受けいたします。御照會下さい

東京都江東區深川三船町一の五

區役所前

長壽院

電話深川(74)五八四八番

御袈裟法衣御調進

東京都港區西久保巴町一〇六

御用達

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

増上寺
宗務所
大正大學
芝中學校
淑徳學園

○企畫施工請負(會・式典裝置裝飾)
○貸物(天幕椅子等 會式典用具)

裝飾
請負

村山裝飾社

村山正治

營業所

東京都文京區江戸川町
電話小石川(85)一五四六

○發刊以來、施本、淨土の集ひ、等の講話テキストとして、手頃のものだと好評絶讃です
○淨土の教を知るのに、これほど要を得て簡なるものは、今までにありません、各信徒一本をお備へ下さい

淨土編輯部編

信徒必携

B六、十六頁
價十圓送八圓

淨土
トラクト

○目次――一、ほとけさま(阿彌陀佛・觀音勢至・極樂淨土)二、みおしえ(法然上人・三部經・念佛・往生)三、おつとめ(佛壇・珠數・木魚・けさ・法衣・合掌禮拜・十念・燒香・墓參)信徒のことば
●五十部以上一割引、百部以上二割引

會仰鑽上人然法